

救急レジデントマニュアル 第4版

相川直樹, 堀 進悟 編

＜書評者＞ 福井次矢 (聖路加国際病院院長)

本書は、1993年の初版以来15年間の販売部数が10万部を超えているとのことであるから、この期間にわが国の医学部・医科大学を卒業したほぼすべての医師が本書を手にしたことになる。救急診療の現場で「まず何をすべきか、その後何をすべきか」という実践的な知識・態度・技量を身につけようとする者にとって、本書は、その内容と利便性からいって、まさに“スタンダード・マニュアル”であることに異論をはさむ余地はないと思う。

本年3月に出版された第4版では、過去6年間の医学・医療の進展を反映し、取り扱うテーマの新設・改廃が行われた。例えば、臨床研修の到達目標、保険適用されたt-PA、改正感染症法、AHA2005、JATEC、肺血栓塞栓症、急性膵炎など、多くの最新情報が盛り込ま

れ、執筆者の変更も全項目の約4分の1にあたる48項目に上っている。読みやすい場所にうまく配置されている32項目のAddendum(補遺)には、新たに「ISS(Injury Severity Score)」と「APACHE II」が加えられた。

初版以来の本書の最大の特徴である、①症候を中心に記載し、鑑別診断と治療を時間軸に沿って述べる、②救急室入室からの時間で区切り、頻度と緊急性を考慮した診断・治療の優先順位を示す、③ほとんどの症候について数ページという簡潔な記述を旨とし、教科書的な理論の記述は省略する、④参考文献は最小限に絞る、などの基本スタンスは維持され、550ページを超える大部の割には、大変コンパクトな作りで、白衣のポケットに入るサイズという、救急現場での利便性を高めるための長所も

維持されている。このことは、本書のような、研修段階にある若い医師を主たる読者対象とするマニュアルには不可欠の要件といえよう。

私がもし今、研修医なら、救急の研修が始まる前の数日間をかけて、たとえ徹夜してでも、本書のすべてのページに目を通したうえで、救急室のローテーション研修に入るであろう。そして、本書を白衣のポケットに入れ、患者さんを診るたびに、症状や病態の頻度に応じて、何度も何度も同じページを読み返す。同時に、本書の余白には、本書以外の情報源から学んだことがらをぎっしり書き込む。3～6か月間の救急室ローテーションが終わるころには、手あかで薄汚れた、ますます愛着のある、自分だけの『救急レジデントマニュアル』ができ上がっていることであろう。

●B6変型 頁600 2009年
定価6,090円
(本体5,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-00800-6]
医学書院刊